最優秀賞

【総合的な学習】

オリジナル合唱曲作りを通した主体的・対話的な子供の育成

神奈川県愛川町立中津第二小学校
菊池（きくち） 崇徳（たかのり）

1 はじめに ―不可能を可能に―

2013年、オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授の論文が世界中で大きな話題となった。「今後10～20年の間に、現在存在する仕事の約47パーセントが自動化される」。つまり、およそ半分の仕事が今後、消えてなくなるのだという。確かに、10～20年前、これほどスマートフォンが普及するとは夢にも思わなかったし、昨今の自動車の自動運転技術（限定的な場面での技術であるが、実際に販売されている自動車の中に見ることができる）などは、ここ数年で飛躍的に進歩している。

今、目の前に座る教室の子供たちが大人になるころ、社会に出て仕事に就くころ、それはまさしく今からおよそ10～20年後。先行きが不透明なうえ、これまでの価値観では立ち行かなくなるような将来が予想される。そんな中で、自分の将来を自分自身で決めていくことができる力を養い、どのような状況に置かれても未来を切り拓いていくことができるような子供たちを育成することが必要である。フランスの作家ジュール＝ヴェルヌは、「人間が想像できることは、人間が必ず実現できる」という言葉を残した。「できそうもない」とあきらめるのではなく、「不可能と思われることでも、みんなで力を合わせ、あきらめずにチャレンジすれば可能になる」という体験を子供たちに味わわせたい。本実践はこうした思いからスタートした。

2 子供たちの実態と課題 ―言われたことは素直にがんばる、言われなければ動き出さない―

本実践に取り組んだのは、平成29年度５年生の63名。本校は、周辺を住宅地が取り巻く比較的穏やかな地域で、子供たちの様子も素直で和やかである。授業や行事にも熱心に取り組むことができ、４月の学級開きのときには、「よく教師の話を聞くことができる、かわいらしい子供たちだな」と感心したほどであった。しかし、１ヶ月ほど過ぎると課題が見えてきた。教師から言われたことは素直にがんばる。授業も熱心に取り組むし、宿題忘れも少ない。しかし、教師からの指示がないと動き出すことができない。高学年の仲間入りを果たした５年生として、これは致命的なように思われた。

本校では、５年生の１学期に小学校で初めての宿泊体験となるキャンプや、町内六つの小学校が集まる連合音楽会、運動会では、５年生で初めて委員会担当として仕事を行わなければならないし、３学期には、在校生の中心となって「６年生を送る会」を企画・運営することになっている。「主体的で対話的」な子供の姿とは対極といっても過言ではない実態が見えてきたのである。

3 世界でたった一つの合唱曲 ―プロジェクトの始まり―

11月に行われる連合音楽会。毎年、町内の小学5年生が一同に集い、合唱や合奏を披露する一大行事である。この行事に向けて、課題解決を主軸とした協働学習を総合的な学習の時間として設定することができないだろうか。例年、既成の合唱曲を選び、話し合い活動などを盛り込みながら練習を進めるといった流れになることが多かった。しかし、これでは本来の総合的な学習の時間としてのねらいである「探求的活動」や「協働学習」、「体験活動」に迫ることができないのではないだろうか。

この実践を設定する以前、音楽の時間に「中津第二小学校のジングルを作ろう」という活動を行ったことがあった。テレビコマーシャルの最後の数秒に流れる、企業名をメロディーに乗せた短い音楽である。いくつかの事例を提示した後、「なかつだいに」を印象付けるジングルを考える、といった学習を設定した。この活動が子供たちにとても好評で、楽譜が読めなかったり、楽器の演奏が苦手だったりする子も、記号や図などを使って自由に楽しく旋律作りを行うことができた。こういった経緯から、合唱曲まるまる一曲が作れないだろうかという発想に至った。子供たちの興味を引きつつ、主体的かつ対話的な活動、さらには探求的で協働的な活動が可能ではないかという大きな期待も感じたのである。こうして、「世界にたった一つの合唱曲を作ろう！」というプロジェクトが始まった。

4 実践

(1) ワクワクさせる意欲付け

このプロジェクトを実現するために最も重要なことは、「そんなの無理」「できるはずがない」というイメージの払拭であると思われた。なぜなら、先に述べた実態から、「オリジナルの合唱曲作り」という課題が、始める前から自分たちに実現不可能なことのように受け止められかねないからである。そこで、第一回目のオリエンテーションでは、いかにこのプロジェクトが実現可能で、夢にあふれるものであるかということをプレゼンテーションすることから始めることにした。

具体的には、合唱曲『旅立ちの日に』の作曲者、坂本浩美さんの事例（当時荒れていた中学校を明るくしたいということで一中学教師が作曲した）や、YouTubeを通して世界的大スターになったジャスティン・ビーバーの事例を挙げ、小さなプロジェクトが世界に知れ渡るような大きなムーブメントを引き起こす可能性を秘めているという話をした。子供たちは、この話を聞いて「僕たちの曲が有名になるかもしれない！」「私たちにもできるかもしれない！」と高揚していた。

(2) 合唱曲のテーマ

最初に行ったのが、合唱曲のテーマを決めることである。ワークシートにそれぞれの思いを書き、投票形式で決定することにした。

↑学習で使用したワークシート。ミシンカッターを使用し、用紙の下半分を手で簡単に切り離せるようにし、投票用紙として提出できるようにした。

挙手形式にしなかったのには大きな理由がある。一つは、子供たちの実態として他人任せでなかなか自分の意見を表出しにくいという点である。挙手形式にしてしまうと、一部の子供によって意見が出され、まったく意思決定に関わらない子供が出てしまうことが懸念された。もう一つは、「全員で作り上げる」という気持ちを高めたいということである。必ず全員が意見をもち、意思決定に参加する。そういったことの積み重ねにより、主体性と協働性を養うことができると考えた。また、教師の立場でもこの投票形式にする利点

が感じられた。普段おとなしく、あまり意見を発表しない子供の意見の中に、キラリと光るアイデアや発想を見つけ出すことができたのである。今回の合唱曲作りでは、そうした普段目立たない子の意見や発想がふんだんに盛り込まれるものとなった。こうして、合唱曲のテーマが「生きる」に決定した。

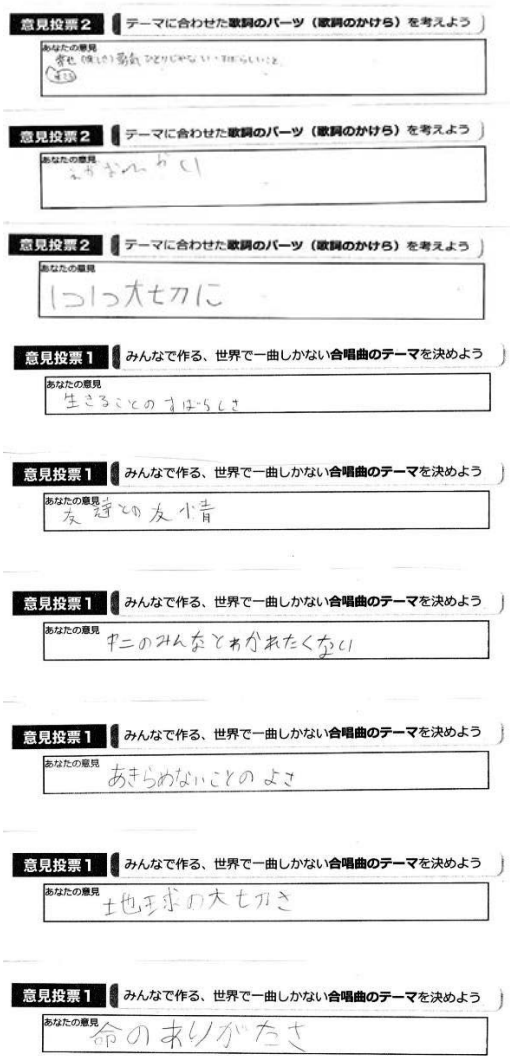
(3) 歌詞作り

テーマが決まると歌詞を作る作業へと移った。しかし、初めから歌全体の歌詞を作るのではなく、キーワードや単語、短いフレーズなど、テーマに合った言葉（これらの言葉を「歌詞のかけら」と呼ぶことにした）を集めることから始めた。

子供たちはそれぞれに心に浮かんだ言葉をワークシートに記入していくのだが、どうしても思いつかない子供も数名見られた。その場合、1年生の頃に全員が共通購入している歌本を見てもよいこととし、「一つでいいからアイデアを出すこと」を合言葉に取り組ませた。結果、当日出席した子供全員が「歌詞のかけら」を考え、ワークシートに記入することができた。こうして挙がった全ての「歌詞のかけら」をもとに、次のステップでは、短い歌詞を作る作業に取りかかった。ホワイトボードに並んだ単語や短いフレーズから、俳句や短歌、標語程度の文字数の歌詞を考えていく。しかし、前の作業に比べ少し難易度が上がるため、まずは自分一人で考える時間を、その後に3人グループで意見交換をする時間を取り、十分に考えやイメージをもててから意見投票を行うという流れで行った。

ここでも、意見が書けず白紙になってしまう子供が出るのではないかと心配したが、今回は予想に反して全員が意見を投票することができた。前回の「歌詞のかけら」の投票の際の「歌の本や友達の意見を参考にしてもよい」「一つでいいからアイデアを出す」といった声かけが子供たちのハードルを下げ、自由に意見を書いて表現してよいのだという意識へとつなげることができたのではないかと考えられる。

こうして子供たちから出された全ての歌詞のアイデアを50音順に整理し、一覧にして配布することにした。



↑「歌詞のかけら」の投票の様子。歌本などを参考にしてもよいこととしたので、ハードルが下がり全員が意見を表出することができた。短い単語に限定したことも、意見を書きやすくする要因となったと考えられる。

↑グループでの意見交換の様子。

↑全てのアイデアを50音順にして整理した。

これは、自分の意見が反映されているという自信につなげたいという思いと、次のステップである「一番の歌詞」作りをスムーズに進めたいという二つの意図があったためである。この活動から本格的にグループ作業となり、3人～4人で一番の歌詞を作ることにした。これまでの活動で、子供たちは少しずつ形になってきているというワクワク感と、音楽が苦手でも楽しく活動できるという安心感が生まれているようであった。グループの中で同じ目的に向かい試行錯誤し、互いの意見を聞き合いながら新しいアイデアを生み出していくという、対話的であたたかな雰囲気が表れ始めた。最終的には、複数のグループの歌詞を合体させるなど子供たちの試行錯誤も加わり、13の歌詞の原案ができ上がった。投票の後に決定した歌詞は、頭文字をとると「なかつだいに」と読める秘密のキーワードを盛り込むなど、子供たちなりに工夫を凝らしたものであった。歌詞のアイデアを50音順に整理したことで、子供たちの斬新な発想を引き出すことができたということも大きな発見であった。

『ひとりじゃないから』

なくこともあるけど　大丈夫
かがやく涙は　明日を変える
つらい時も　ひとりじゃないから
だいじな人は　すぐそばにいるから
いきることは素晴らしい
にじ色の夢に向かって　羽ばたこう

ななの色の未来が　待っている
かがやく笑顔は　宝物
つづく道は　ひとりじゃないから
だいじな人は　すぐそばにいるから
いきることは素晴らしい
にじ色の夢に向かって　羽ばたこう

↑子供たちによって作詞された合唱曲の歌詞。頭文字を読むと「なかつだいに」と読めるような工夫が施されている。歌詞のアイデアを50音に並べ替えて提示したことで、このような発想を引き出すことができたと考えられる。

(4) メロディー作り

いよいよでき上がった歌詞にメロディーを付ける活動である。実をいうと、この活動こそ「子供たちにできるのだろうか」と一番心配していたのだが、活動を始めてみるとそれは杞憂であるということがすぐに分かった。決定した歌詞を6分割し、選んだフレーズにメロディーを付けるという課題だけを子供たちに投げかけたのだが、これまでの活動から協働的にプロジェクトを進めていくということを身に付けた子供たちは、グループごとにどんどんメロディーを考え始めていた。

↑グループでメロディーを考えている様子。

ワークシートにはあえて五線譜ではなく罫線だけを引いておき、記号や音符、図などで自由にメロディーのアイデアを記入できるようにした。メロディーが完成したグループから、録音を行った。方法としては、デジタルカメラのビデオ録画で撮影したり、学校に配備された携帯端末機器を使用したりして収録した。

後日、六つのフレーズそれぞれに考えられた複数のメロディーを順番に再生し、一つずつ選ぶという形で投票を行った。これが夏休みの前日、1学期の終業式の日のことであった。

↑29年度に配備された携帯端末機器。ICT機器の活用は本実践には大変重要であった。

(5) 外部人材の活用と曲の完成

投票で決定した六つのメロディーは、それぞれに調性やテンポ・リズムなどがバラバラであったため、多少の調整が必要であった。夏休みのうちにメロディーを微調整し、仮のピアノ伴奏を作成、外部の声楽家の先生にお願いをして仮歌を録音させていただいた。こうしてでき上がった一番までの仮歌は、2学期が始まるとすぐに「お披露目会」として子供たちに聞いてもらった。自分たちが作曲したメロディーが本格的な合唱曲になっていることに、みんな驚きと興奮を抑えられないような様子であった。曲の構成をこの後どうするのかということと、曲の題名を何にするのかという二つが2学期に残された作業となった。曲の構成については、二番までの合唱曲にするということになり、二番の歌詞を考えるという作業へと入った。一番の作詞との最大の違いは、メロディーがすでに決まっているということ。子供たちはこのことに非常に苦戦している様子であったが、一番に盛り込んだ「なかつだいに」というキーワードを二番の歌詞にも採用する方向で意見が固まった。曲の題名については、様々な意見が出された中で、曲の中盤に登場する『ひとりじゃないから』という歌詞を題名として採用することになった。どの決定場面においても、丁寧に子供たちの意見を吸い上げ、投票をし、時には投票結果に対する精査や話し合いを行うなど、必ず子供主体で活動が進むように配慮しながら指導を進めてきた。また、『COSMOS』や『BELIEVE』などの合唱曲の作・編曲家として活躍され、全国各地の合唱指導にも奔走されている富澤裕先生にもご指導をいただく機会を設定した。効果的に外部人材を活用することで、子供たちの士気を高めることはもちろん、学校だけでは難しいプロジェクトを実現させるための大きな助けとなった。

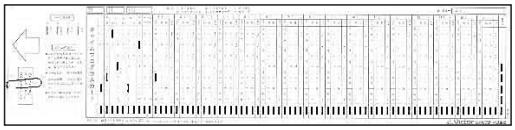
↑作曲家の富澤裕先生にご指導いただいた。外部人材の活用の重要性を感じた。

(6) プロジェクトの広がり

当初、子供たちが作った合唱を連合音楽会で発表するかどうかについてはあえて話題にしなかった。曲が完成した10月、そこで初めて「連合音楽会に歌う歌は何にしよう?」とアンケートを取り、子供たちの意向を確認した。結果は、満場一致で『ひとりじゃないから』に決まった。連合音楽会のプレ演奏会では、保護者の方々から多くの賞賛の声をいただき、本番では、町内全ての5年生に披露することができたほか、他校の先生方からも多くの反響をいただいた。さらに、翌年には神奈川フィルハーモニーオーケストラによりオーケストラアレンジされた「ひとりじゃないから」を全校児童で合唱するなど、自分たちが生み出した曲が少しずつ広まっているという実感を子供たちに与えることができた。

↑神奈川フィルハーモニーとの共演。自分たちが生み出した曲が広く認知され始めていることを、実感し始めている様子が見られた。

6年生に進級した平成30年度には、卒業までの1年間を通し、学校や教師、在校生、保護者など、6年間お世話になったことへの感謝の気持ちを具現化しようという「感謝プロジェクト」という学習単元を設定した。具体的には、自分たちの作曲したこの『ひとりじゃないから』を学校にプレゼントする「贈呈式」、学校のチャイム音を本曲のメロディーにするなど、児童から様々なアイデアが出された。チャイムの制作では、マークシート型のプログラムカードに音程や音階、音の長さなどをマークする活動へとつながっていった。プログラミング教育とのつながりも生まれ、学びの広がりを感じることができた。



↑チャイムプログラムカード。なかなか意図したメロディーにならず、試行錯誤とトライ&エラーを繰り返す中で、自然と対話が生まれる児童の姿が印象的であった。

話し合いを重ねる中で、自分たちが作曲した「ひとりじゃないから」を本校のオフィシャルサポートソングとして、卒業した後も長く歌い継がれるようにしていきたいという声が強く聞かれるようになった。児童のこの曲に対する思いが、この「感謝プロジェクト」という単元に自然な形で表れると同時に、これまでに学んできた主体性、探求性といった力が芽生えてきていることを感じる瞬間でもあった。

『ひとりじゃないから』ができるまで

- 合唱曲のテーマの決定
- 歌詞づくり
  - 歌詞のかけら集め
  - 短いフレーズづくり
  - 一番の歌詞づくり
- メロディーづくり
- 仮歌の完成
- 曲の構成の検討
  - 何番までの歌にするか
  - 前奏・間奏・後奏の検討
- 曲名の決定
- 二番の歌詞づくり

5 おわりに

子供たちの主体性、協働性を高め、「みんなで協力すれば夢のようなことが実現できる」という実感をもたせたい。そんな思いをもって本実践を行ってきた。「自分たちでこんな素敵な曲が作れるとは思わなかった」「初めはできるはずがないと思っていたけれど、本当にできてすごくうれしい」といった子供たちの声や、「子供たちが作った曲とは思えない」「歌詞を聞いて涙が流れた」という保護者の声を聞いたとき、この実践を通して学校全体の雰囲気、さらには、地域の学校を見る目に大きな変化を生み出すことができたということを感じることができた。

実際、今年度の本校の不登校児童数はゼロである。5年生までなかなか学校に向かうことができなかった子供が、30年度6年生として毎日元気に登校し、卒業式ではこの曲をみんなと一緒に歌うことができた。YouTubeでの世界デビューという目的には至らなかったものの、学校ホームページでは歌詞とともに本曲の音源が公開されている。また、「地域の合唱団でも歌いたい」という声をいただき、町の合唱祭で演奏されるなど、子供たちの取り組みが学校の外へと広がっている。さらに、新聞で今回の取り組みが紹介されるなど、子供たちの成就感を高めることにもつながった。「いきることは素晴らしい」「にじ色の夢に向かって」という歌詞にあるとおり、無限の可能性を胸に不可能を可能にすることができる子供の育成に今後も取り組んでいきたい。